

能讚慶大寺東

KEISAN-NOH

ごあいさつ

「東大寺盧舎那大仏の造願を発願されました聖武天皇のみこころをしのび、大仏様に日本を代表する伝統芸能である『能楽』を奉納することで、共に生きる喜びを表現しよう。」

そのような思いから、春（聖武天皇をおまつりする「聖武祭」の日、例年5月2日）と秋（大詔を発せられた天平15年10月15日にちなみ、例年10月15日）に慶讚能を奉納させていただいて参りました。

盧舎那大仏造願の発願から1280年の時空を超えた現代におきましても、国家の安泰と人々の幸せを願われた聖武天皇のみこころをしのぶことの大切さを、本慶讚能を奉納させていただきますことによって、多くの皆様に伝わりますよう心より願っています。

We have dedicated a NOH to the big BUDDHA to think of the emperor SHOMU, who proposed to build a big BUDDHA in Nara in the 8th century. He decided to carry out such a great project for the sake of calming some confusion caused by plague or disasters that had distressed people in those days. So, now we express our pleasure of life in peace by dedicating noh performance. The reason why noh is chosen for a dedication is it is the most traditional performance in Japan.

Twice a year (2, May and 15, Oct.), Todaiji temple performs noh for dedication. 2, May is the day of festival for emperor SHOMU, and 15, October is the day when the emperor made his desire public. It is 1280 years before when the big BUDDHA was planed to be built. We hope we will have conveyed the emperor's wish for peace and happiness in the nation in the years ahead.

二〇二四年十月十五日(火) 午後一時半始

大仏さま秋の祭り

東大寺慶讚能

於 東大寺鏡池特設舞台

(雨天 東大寺総合文化センター金鐘ホール)

ご挨拶 前後のいずれかで実施

仕舞

須磨源氏

山下あさの

細矢 信治

葵 上

生一 知哉○

山田 薫

一調

井戸 良祐○

屋 島

高野 彰○

能

山中 雅志○

森山 泰幸

源氏供養

有松 遼一

岡 充 荒木 建作○

貞光 智宣

岡

山下あさの

細矢 信治

生一 知哉○

山田 薫

井戸 良祐○

梅若雄一郎

○印は重要無形文化財総合指定保持者

主催／東大寺慶讚能実行委員会 主管／奈良新聞社

協賛／(株)柿の葉汁本舗 たなか・(株)尾田組・日本料理花鹿・菓匠 千壽庵吉宗

協力／山中雅志・ひかり装飾株式会社

演目の説明

●仕舞「須磨源氏」

『源氏物語』の須磨・明石の巻の物語である。日向国の神官藤原興範は伊勢神宮へと参詣に旅立つた。途中、光源氏が住んでいたと言う摂津ノ国須磨の浦に立ちよった時、若木の桜を眺める老人に出会った。老人は光源氏の住居にあった桜であると説明しながら光源氏の生涯について語り始めた。語り終わると、「私は光源氏である」と言い終え消えて行った。旅寝をしているとどこからともなく管弦の音が鳴り響き興範の前に光源氏の霊がありし世の気高い姿で現れた。光源氏の霊は「兜率天に住んでいる、今夜は月下に袖を翻して青海波の舞楽を舞う。」と言い華やかだった昔を懐かしみながら舞い続ける、光源氏の霊は夜明けとともに静かに消えて行った。

●仕舞「葵上」

左大臣の息女、光源氏の正妻である葵上は執拗な物の怪に悩まされ病の床に伏していた。照日の巫女に物の怪の正体を占わせると、破れ車に乗った六条御息所の生霊が現れ「あら恥かしやと今とても、忍び車のわが姿」と恨み事を言った。六条御息所は桐壺帝の弟の妃であり皇太子紀として栄耀栄華を誇った。夫に先立たれ光源氏と恋仲になった。昔、葵祭りの行列に出る光源氏を見物に行こうと質素な牛車で出かけた六条御息所だったが地位と権力に物を言わせた葵上一行に車を打ち壊され無理やりその場を立ち退かされた。その屈辱感は耐えがたく、魂は体を抜け出し葵上に取り憑くようになった、と話す。病臥の葵上を激しく打ち据え、葵祭で打ち壊された車に乗せ、この世から連れ去ろうとする。叡山横川の小聖が祈祷を始めると、怨みの余り鬼の姿へと変じた御息所の怨霊が再び現れ、その怨念は行者の法力と激しく争ったが、心を和らげ成仏の身となって立ち去ってゆく。

●一調「屋島」

西国修行の旅に出た僧たちが讃岐国の屋島を訪れた。僧たちは漁翁の宿で一夜を明かすこととなった。漁翁は僧たちに屋島の合戦を語り始めた。物語が終わった時に、私は源義経の亡霊だと漁翁が明かし「よし常の憂き世」と言い残して消えた。僧は、夢で再び義経に会おうと戦場になった場所で苔を筵に眠りについた。やがて、甲冑姿で現れた義経の亡霊が現れた。源平合戦の最中に落とした弓を危険覚悟に取り返した修羅道のことを語り続けながら夜が明けて行き僧は夢から目覚めた。

●能「源氏供養」

安居院の法印が石山寺へ参詣しようとする女に呼び止められた。「源氏物語」を石山寺でかいたが、光源氏の供養をしなかったために成仏できないので、源氏と自分の供養をして欲しいと求めてきた。「源氏の供養の時は自分も現れて、共に源氏を弔う」と約束。法印は「源氏物語」を書いた方かと問うと、女は紫式部と我が身の知られたことを恥じながら姿を消して行った。石山寺で弔う法印の前に、紫式部の霊が現れ「源氏物語」の巻名を織り込んだ現文に世の無常と阿弥の導きを願って舞を舞うと、これで光源氏の供養と併せて自らも成仏できると喜んで姿を消していった。

●仕舞とは…能のみどころを抜粋して能装束を着けず、紋付袴等で演じる形式をいいます。

協力 山中雅志 ひかり装飾株式会社



なら本店 近鉄奈良駅前 行基像噴水前
営業時間:9:00~19:00 電話番号:0742-81-3651



あをによし。

柿の葉すし本舗たなかは
今年も慶讃能を応援しています。